

大賞

結衣公記

仲手川純一

文化祭の出し物についての話し合いで、バカな男子（岡本とか鈴木らへん）が推した「ゲイカフェ」が担任の真野によって即却下されて、「なんかない？」と隣の席の平野さんが言ってきたので、祭（地元では祭と言えば天王祭り、神社と言えば津島神社で公園と言えば天王川公園のことなので覚えておいて欲しい）の時に叔父さん（母の弟）が「信長が祭りを見た」という記録がある、という話から昔、信長の家来だった人が書いた『信長公記』という書物に津島がでてくるという話になり、現代語訳もでて図書館にあると聞いて借りて来てパラパラめくってみたら「津島の堀田道空邸の庭で信長が天女のコスプレして踊った」という記述があったので、それ再現したらいんじゃない？と言ったらなぜか平野さんのテンションだだ上がりで、一気に『信長のコスプレダンスパーティー』に決定してしまっただけだ。

「それで結衣、どうすんの？」と昼休みに親友のエリちゃん（かわいい）が聞いてきたが、こちらとしては特にアイデアもない

のだけど、ていうかここは平野さんが仕切るべきなんじゃないの？と思っただがガリ勉キャラの平野さんがここで大活躍できるとも思えず、とりあえず、

「まずは信長役、決めなかんわ」と言ってみた。

「やっぱイケメンだよ。信長」

「そりゃあイケメンじゃな盛り上がりかんわ」

「ほんならうちのクラスの男子じゃいかんがね」と言うので、

「イケメン知つとる？」と尋ねたら、

「おる。一年の森君、サッカー部！」とエリちゃんのテンションも上がってきた。

「間違いないイケメンだわ」

「知らんわ。でら？ だら？」

「どらだわ」

「・相だがね」というやり取りがあった。

それで放課後森君の教室まで見に行ったのだが、はたして森君は確かにアイドルのようなイケメンだった。ふとエリちゃん

を見ると、森君を見るその目が「はあと」になっていて「かわいいな」と思った。よし、森君はエリちゃんに任せよう。

お風呂に入った後に叔父さんとラインした。

叔父さんは私と同じ高校をでて東京の大学に行ったものの卒業後は仕事が続きせず（母曰く子供の頃からメンタルが弱い）職を転々としてフリーターみたいな感じで生きていたのだが、昨年祖父が亡くなって、祖母の世話のために帰ってきて、祖母の病院の送り迎えとか庭の片づけなんかをやつて、たまにバイトしたりしてなんとなくブラブラしているダメ人間で、またビジュアルが少々キモオタ風ということもあり、母は私が叔父さんと話したりするのを好ましく思っていないようだが、特にエロい目で私を見てくるような感じもなかったのでたまにラインしたりしている。（電話は叔父さんが苦手らしいのではない）

「今日思いついたんだけど、神社の横に『堀田家住宅』ってあるが？」

「おう。あれ昔は堀田邸って言っとったがな」

「あれって堀田道空の家？　っていうか堀田道空って誰？」

「なんか美濃の斎藤道三の家来らしいよ」

「美濃って岐阜でしょ？　遠いがね？」

「昔はそういうのあったらしいよ。知らんけど」

「ふーん。ほんで堀田家住宅がその道空さんの家なの？」

「ちゃうだろう？　あれは江戸中期だで。時代が合わんでかわ。ほんでも親戚とかじゃねえか？　四家七苗字って聞いたことあるか？」

全然わからなかったのでネットで検索しまくった結果、かなり津島に詳しくなった。

中世、津島は有力土豪による自治領のような感じだったようで、そこへ織田弾正忠家（この意味がわからないけど信長の家系らしい）が攻撃して、後に和陸して信長の一族に従う感じになったっぽい。それでなんか津島は当時は湊町でめっちゃお金持ちだったみたいでその資金を利用して、信長のお父さんがメインの織田家を圧迫して尾張で勢力を伸ばし、そこから家督を継いだ信長の天下統一の夢が始まったみたいだ。

なんか信長のお父さんがすごい！　と思った。お父さんががんばったおかげで信長が夢を見れたような気がする。例えば豊臣秀吉みたいな裸一貫スタートだったらどうか。信長は信長公になれたんだろうか？

昼休みにお弁当を食べながらエリちゃんがニヤニヤしているので何事かと聞いてみたら、信長役の交渉と称して森君とラインを始めたのだそうだ。なんとというか「今が人生のピークです！」という空気を全身から発していて眩しい。

「ほんで森君、信長役はオーケーなの？」

「うん。ダンスは自信ないって言っとったけど、一緒に練習しよう！　って」

「ええがね。ロマンスの予感だがね」

「なんか文化祭に向けて盛り上がってきたね」

盛り上がつとるのはあんだだけだわ、とは言えなかった。私にはそういうところがある。

月曜日のホームルーム。担任の真野が教室に入ってきて言った。「仮装ダンス大会は中止と職員会議で決まりました。最近LGBTとか問題になつとるで・高校の文化祭にはふさわしくないで」

これにはなんやかんややる気になっていた男子たちもどよめいていたけど、とは言えわざわざ職員室に抗議に行くようなパッションを持っている人もおらず、「信長コスプレダンスパーティー」計画は完全に白紙となり、結局クラスの真面目グループ主導で「LGBTが抱える社会課題についての展示」をやるということになった。あらあら。

「ええんか？」と叔父さんのライン。

「うん、まあしようがないよ」

「ほうか。どうしてもやりたかったら戦ったほうがええぞ」

「ええんだわ。別にそんな執着しとらんで」

「ほうか。まあ今回は結衣のターンじゃなかったってことか」

「うん」

「まあそのうちええ風ふくで。ええ風吹いたらつかまえたってちよう」

「何それ？」

「人生には何回かええ風吹くで」

「ふーん・叔父さんにも吹いた？」

「え・・・」

やばい！　触っちゃいけない叔父さんのデリケートゾーンだったか？

「吹いたよ」

「え？　吹いたの？」セーフや・・・

「ちよいちよい吹いたんだわ。思い返せば。それをワシは逃してきたんだわ。痛恨でござる」

「ござる（笑）」

「年とともに吹かんくなるで。ワシもちよつと前まで高校生だったのに、いつのまにかもうアラフォーだがや。高校入ってすぐに勉強ついてけんくなつて、そつからずとうだつ上がらんがや。巻き返せんうちに周りも自分みたいな奴ばかりだわ。仕事で会った同世代の人が突然死とかある。親が死んでも金なくて葬式だせんかった奴もおる」

「ほう」そうなのか・・・

「結衣は『今風吹いたかな？』って思ったら全部行ってちよう。」

グイって行つてちょう。ほんで豊かな人生にしてちょうよ」

「はあ・・・了解」とかわいいいネコちゃんのスタンプも押ししておいた。

次はエリちゃんだ。

「森君怒つとつた？」と聞く。

「ううん。しょうがないって」

「ほんならよかつたわ」

「うん。それで、今度の日曜なんだけど」

「何？」

「森君の友達がなんか歴史オタクで、堀田家住宅見たいって」

「行ったことないかな？」

「名古屋の子らしくて」

「ほうなんだ。名古屋の高校落ちたんかな？」

「知らんけど。そんなもんで日曜日に森君とその友達と三人で見に行つたって欲しいんだわ」

「ええけど。エリちゃん来んの？」

「模試だもんで。名大模試」

「え？ 名大受けるの？ ってゆうか、うちらまだ二年だが？」

「三年からじゃ間に合わんがね」

「ほうなんか。全然知らんかつたわ」

「うん。人生かわいいだけはいかんて」

なんと！ この人からそんな台詞が放たれるとは！ エリちゃん

ん、恐ろしい子。

「エリちゃんかわいいだけじゃなかつたんだ」

「おうよ！」

「キャラおかしなつとるよ」

「だもんで、森君？ 正直ラインやつとつてもおもしろいんだわ。バカっぽいっていうか」

哀れ森君・・・なんかごめん。

「だもんで結衣、あんたよかつたら付き合つたりゃあ。それか友達のオタクか・・」

ちようどいい気候の日曜日。正直面倒臭かつたが元はと言えば私の発案で始まったことであるため、今日はしっかりとお世話させていただきまっしょい！ と神社の南門のどこにある交番の前で待っていると、森君が自転車に乗ってやってきた。ひとり。

「ああ結衣先輩、どうも」

「どうも・・友達は？」

「それがなんかおなか痛いつて・・」

「そうか・・ほんならどうする？ たこ焼き食べて帰る？」

「せっかく来たもんで・・見ていきます。俺も見たことないんで。あ、たこ焼きも食いたい・」

というわけで神社でお参りしてから二人で見学することにした。

勝手口？ のところに「堀田」と書かれた暖簾がかかっていて堀田木瓜といわれる家紋が描かれていてカッコいい。ちなみに津島神社の神紋は織田木瓜という織田家の家紋と同じデザインだ。

三百年前に建てられたとは思えない綺麗さで、私は特に台所のカマドがカッコよくてグッときてたのだが、森君はそのへんあんまり興味ないみたいだった。

「結衣先輩の家、津島でしょう？」

「そだよ。近所だわ。だもんでここも小学校の時に社会科見学できとるよ」

「ふうん、じゃあ南朝だ」

「え？」

「俺、佐屋だもんで、北朝だで・・・」

佐屋というのは今は合併で愛西市という名前になっているけど津島のすぐ南隣にあつて、うちの高校も津島と佐屋のちょうど境あたりにあるのかかなり身近な存在なんだけど、北朝とか南朝とかはよくわからない。

「何それ？」

「知らんの？」

「全然知らんわ」

「なんか南北朝時代？ に、南朝の皇子が追われて逃げてきて、北朝方の佐屋の侍が殺そうとした時に南朝方の津島の侍が助け

たつてというのが天王祭りの由来つて、お腹痛い友達が言っとつたよ」

「ふうん、全然知らなかった。うち先祖代々津島つてわけじゃないで・・・」

「そうなんだ」

「ほんで森君とは佐屋の侍の子孫なの？」

「いや、先祖は農家だもんで・・・」

「ほうか」

「だもんで津島の人と佐屋の人が付き合つたらなんかええかな？ つて思つて・・・」

「ロミオとジュリエットか」

「うん」とはにかむ森君。ロマンティックか！ 森よ！

「エリちゃん今日模試だもんで。残念やったね」

「いやー実はエリ先輩はあんまり・・・話合わないつていうか・・・むしろ僕的には結衣先輩のほうが・・・」

あれ？ これ告白？ なんか森君ジャブ打ってきたの？ 森ジャブなの？ 告ジャブなの？ これがおじさんが言つてた風か？ ゲイつて行く時なのか？ 落ち着け私！

外に出て砂利の敷かれた庭を歩く。白い外壁がカッコいい。屋根にうだつが載っている。

「あれ、『うだつ』だわ」と自分を立て直して言った。

「え？ うだつ？」

「うん『うだつが上がらない』とか言うが？ あれが語源だが」

「へー。そうなんだ。あの槍みたいな奴？」

「いや、その左、っていうか奥。屋根の上になんか鳩時計みたいなもの付いとるが？」

「あー、あれね」

「あれ、飾りだで、高いんだって。お金持ちじゃないと付けられないのかわ」

「ほーん」

「うん。森君、顔まあまあいいけど、それだけだがね。伸びしろないでしょう？」

「え？」

「このままだと伸びてかんでかんわ。うだつ上がらんくなるで」

「そうなの？ やばくない？」

「うだつ上げてかなかんわ。信長みたいになりたいでしょう？」

「どうすればええなの？」

「成績ええなの？」

「全然あかんわ。赤点だわ」

「ほーん・いかんがね。ほんであんた彼女おるんか？」

「・・おらんけど・頭悪いのバレとるでかんわ」と言つて森君はちよつと私を見た。彼女おらんで、あんたを彼女にしたい、そういう顔だった！

これ絶対風吹いとる。私は裸一貫じゃない。お父さんとお母

さんがくれた、健康な身体とまあまあの顔とそこそこの努力で蓄えた知力と、あとダメな叔父さんがくれたアドバイスもある。これは逃しちゃう駄目な風だ。

「・ほんなら私が勉強教えたるわ。そんで彼女になったるわ」

「え？ ・・・ええの？」

「ええよ」

「じゃあ・・よろしくお願いします」

なんとという僥倖！

「毎日ラインして」

「うん・・なんか結衣先輩、グイグイ来るね」

「そっちのほうがいいでしょう？」

「うん・・あのさ」

「何？」

「結衣って呼んでもいい？」

「いかんわ・・私県大行くで、あんたも受かったらええよ」

「はい」

「ほんならたこ焼き食べに行こか」

グイって行つたら風掴めた。

こうやって、今もつづく私の長いピークが始まったんです。

〈了〉